

都道府県別賞一等

大切な人へ送る「思いやりの心」

沖縄県 浦添市立浦添中学校 三学年

照屋 乃々果

私が生命保険のことを知ったのは、小学六年生のときです。テレビで生命保険の広告を目にし、何気なく父に聞いてみたのがきっかけです。父から生命保険とはどのようなものなのかや、その仕組みを教えてくださいましたが、当時の私は生命保険の重要性をあまりわかっていませんでした。様々な種類がある生命保険ですが、どれも同じような内容に感じましたし、ずっと使わないかもしれないのにお金を払うなんて損をしているのでは、とまで思っていました。家族も私自身も、それまで大きな病気や事故に遭ったことがなかったので必要性を感じにくかったのだと思います。

そんな生命保険に対する印象が一変したのは、私が中学二年生の頃です。今まで至って健康だった祖父が、何の前触れもなく急に自宅で倒れ、病院に運ばれました。心臓にある大動脈の病気で、しばらくの入院と手術が必要になりました。祖父も祖母も仕事はしていないので、もちろんたくさんのお金をすぐに払うことはできません。そんなときに助けてくれたのが、祖父が入っていた医療保険でした。その保険のおかげで入院や手術の費用を支払うことができ、祖父も体調が回復し無事退院できました。そのことを母から聞いたとき、初めて生命保険の大切さに気づかされました。もし祖父が保険に入っていなかったら、いつも通りの日常を取り戻すのにとても時間がかかっていたと思います。私はそれまで、『保険なんてずっと使わないかもしれないのに』とっていました。だからといって保険に入らないことは損ではないと考えを改めました。そもそも、絶対に危ない目に遭わないという人は一人もいないので、誰でも完全に安心はできません。保険を使うか使わないかは関係なく、加入するだけでも安心を得られるのが生命保険の良さだと私は思います。

そんな安心を得られ、リスクから守ってくれる生命保険ですが、必ずしも全て良いものとは限りません。生命保険は、一人一人必要なものが違うので、無闇にたくさん入っても損をしていますが。様々な生命保険の特徴をよく知り、本当に必要なものを選択することが大切だと思います。

そして何より、生命保険は「思いやりの心」の表れだと感じました。私の祖父が、祖母や私たちのためを思って生命保険に入ってくれたように、生命保険は大切な人へ最後に送る優しさだと思います。誰にでも起こりうるリスクに備え、いつも通りの日々を守ってくれる生命保険は、十分入る価値があると

第60回中学生作文コンクール

今では思うようになりました。私も、将来結婚し家庭をもつことができたら、大切な人のために生命保険に入ろうと思います。